

気づかないうちに

1. イオウイロハシリグモ

クモの仲間は網を張るものばかりではありません。ハエトリグモのような非造網性の種も多く存在します。その中でも大きくて水辺から林縁の草むらまでよく見られるものが、このイオウイロハシリグモです。

草や低木の葉の上でじっと獲物が来るまで待つ、待ち伏せ型です。チョウやハエが近くに止まると飛びかかってとらえます。私たちにはその存在がよくわかるのですが、チョウには花のように見えているのでしょうか。偶然を待つことは効率的ではありません。陰に隠れているのではなく、葉の上に大きく脚を広げていることから意図が推測されます。見張っていることは確かで、人がそばに近づくときとさっと葉裏に隠れてしまいます。



卵囊を持つ
イオウイロハシリグモ

右の写真はノコギリカメムシを捕らえたもので、大きな獲物も牙で消化液を注入しておとなしくさせます。



イオウイロハシリグモ



カメムシを捕まえた
イオウイロハシリグモ

夏は成体が見られる時期で、口でくわえた白い卵囊(らんのお)を腹の下に隠して移動するところを観察できます。クモの卵囊はたくさんの卵をまとめて糸で包み込んだもので、網にぶら下げる、物陰につける、雌が自ら運んで保護するなどいろいろです。卵囊は種により特徴的な形態をしていますので観察リストに加えたいものです。

2. オオバコ

どこの道端でも生育している草です。打吹山の遊歩道ではどのようになっているのでしょうか。丈の低い草ですから日陰では生きていけず、打吹山の樹林内には存在しません。しかし、遊歩道には断続的に見られ、頂上でも少し生えています。シイなど上を覆う樹木がなく、日が差す長谷の展望台や峠の展望台付近などに生育が見られます。

わざわざ種子を運ぶ人はいません。しかし、オオバコの種子は遊歩道を歩いた人たちを利用して登ってきたのです。オオバコは、春から秋にかけて花茎を伸ばし、種子をつけます。この種子が曲者で、穂から離れて地面に落ちた後、水を吸って粘液に変化する物質を種皮の細胞壁下に作っています。種子を倍の大きさにもする大量の粘りで靴底にくっつく、というわけです。熟した種子を採取して水に入れて見てください。あっという間に膨れます。



左：吸水してない種子
右：吸水し粘液が出た種子



踏みつけに強い形のオオバコ



オオバコの花穂

運んでもらうためには強くくっつけばよいというものではありません。適当なところで離れなければ意味がないからです。どれくらい土道を歩いたら粘液が取れて種子が離れるのか実験が必要です。しかし、大山の頂上でもオオバコが見られるため、打吹山でできる実験ではないようです。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2019)